

日本書紀待卅一卷其

和書
一〇五二二號

百三十八

内一六八三號

内閣文庫		
番號	和	10522
冊數	156 (147)	
函號	特 85	1



高野山
高野山

内一三六八三號

高野山
高野山
高野山
高野山

千穂峯の故事を取て其名を設作れり事著うりけれ
悉ふ云り力定^足ざる者あり其三田井村の山を二上峯
と云ハ以辺小猿伏山と云有テ猿田彦神の遺地と傳
れば大鉗小鉗二神の住れし謂を以テ二神峯と云
ある小其谷間小一畝計の田有テ三四年の程小自
然小苗を生し稲の實る事有テ其を苜取テ十社明神
の御供小奉り故小御^ハ禄田^{ロウデン}と云と云り其神小就テ然
る自然生ハ稲の成出ハ然も有べし以テ高
千穂二上峯と云ハ是謂れ無き事ハ其^時後^後國^後魚
葉山と云ハ大山有^時崎と自然小苗を生し稲の實る
事有^時り斯る類猶諸國ハ有べき事ハ此ハ高千

高野山
高野山
高野山
高野山

〇八百九十一

續り証さし成し難かる可し其高千穂莊内わ怪しき
地名被布り一小真名井二小高天原と号たり小山
有り三小搥觸那神社有り神代の昔諸國の神等各其
并給ふ所園を振給ひし所ふうと云々殊小笑ふ可し
四小高山末五小短山末六小早川瀬七小櫻瀬ふど
以四小甚加ふ事あり八小天岩戸九小神樂岡右等
の類ハ何れも大被詞又ハ神代の古傳ふと依て非
ぬ名共を改たりかて実ハ以事かして無く外ハ神
代の古址ありけむを襲之高千穂峯の事共を皆かく
以曰并郡の方ふ取成さむとて果ハ却りて其偽ふ
る事自賢いせ ○日向ハ傳六百二十
かし者ふむむ ○日向ハ傳六百二十
の事ハ同卷百二十ハ説たりき ○高千穂峯の事ハ上
八百七 小注ハガ如く日向國諸縣郡と大隅國贈於郡
十下 二郡亘れし謂ゆる霧島山を云ふなり然るハ其山を
高千穂峯と云ふ及ぶと其二郡ハ亘りて高千穂

と云ふ地名ハ有し如くおし思えたり其ハ古事記
ハ故日子穂く手見命者坐高千穂宮伍百捌拾歳御陵
者即在其高千穂山之西也と所見たる先御陵の御事
り申す可し記傳十七 八下 小以高千穂ハ霧島山を
云ふり在具高千穂山之西也とハ書紀ハハ後久之彦
火火出見尊崩葬日向高屋山上陵と有り口訣ハ高屋
前為竹屋也と注し延喜諸陵式ハ日向高屋山上陵彦
火ハ出見尊在日向國無後戸に見え和名抄郷名ハ大
隅國所屬郡鷹屋と有り偕以高千穂山ハ右の霧島山
ふ可ければ其西ハ大隅國あり然るを日向と有ハ

上代ハ大隅薩摩等て係リ日向國と云ハ事有レハ
 あり薩摩國人の云く高屋山陵ハ大隅國所屬郡内浦
 郷北方村高屋山の巔ハ在リ此山上(山)を今俗ハ國見
 山と云ヒ國中を見渡す所あり麓ハ高屋神社有り彦
 火火出見尊を祭ル云云取^要と有り然^ハ時^ハ其高
 千^千其穗宮ハ其高千穗山の麓ハ在リ故ハ同トク其称
 を用せて給へるなり此宮の事記傳ハ薩摩國人の云く
 彦火火出見尊の宮ハ大隅國東原郡鹿兒島神社ハ此
 尊を祀ル^(今ハ正八幡宮と申フ)と云ウと見え^テ其宮内村ハ國分郷
 なる由ありければ此邊古ハ高千穗の地ありし^ハ

ありけり^{右ハ百七十七下ハ注スガ}如く贈於郡ハ智尾
 由ありければ^其高千穗峯を取圍^ミたり地をバ^凡て
 然云う^ハを其地ハ高千穗神社を訛りて乳母神社と
 云^ハなり千穗と云地名又古事記白橋原宮段ハ神^ハ倭
 伊波礼毘古命^典其伊呂兄五瀬命二柱坐高千穗宮談
 云と有^ル高千穗宮ハ又右の彦火火出見尊の^ハ別
 あり神皇紹運章第一二書ハ次狹野尊亦号神日本磐
 余彦尊所稱狹野者是年以^少時之号也後捺平天下奄有
 八洲故復加号曰神日本磐余彦尊と有^テ年^ハ少^ハ御在
 一坐けり御時の大御名を狹野尊と稱奉れり^ハ地名
 を以て号奉れり者あり白尾國柱云く狹野神社日向

國諸縣郡高原郷蒲田村作野原の地奉祀瓊杵尊合祀
本木花間耶姬命彥火火出見尊豐玉姬命尊不合尊玉依
姬命東掖宮神武天皇吾平津媛西掖宮經津主命武甕
槌命各神像を安置了神武天皇以地して降誕有る故
小狭野とハ云ふ可し然して當宮ハ神武天皇の御
時ハ具皇祖祖王父祖瓊杵尊を奉崇給ハしあり可
し所以ハ神武天皇ハ今東宮ハ奉祀せりして後の從
祭ふる事を知べさふり社傳ハ孝昭天皇の當宮を
創建し給ハし由記セり傳云四條天皇文曆元年申午
十二月廿八日霧島火止祠宇並燒失小及ふ以時神興

を奉じて同郡高城郷東霧島ツクダリ小込奉り行宮を宮て神
人社僧皆焉小徒る其後國中乱世と成て久しく古小
復らず然るを天文十二年癸卯先君始て社僧小命し
て狭野權現ハ神興を高城一發して高原の麓小込
奉りて行宮を構お後慶長十五年庚戌先君狹野の故
迹漸く廢せし事を恐れ特旨有て悉く狹野原の旧地
を復興して祠壇を改建し封戸を増加し給ふ同十七
年壬子十一月十八日其神像を奉りて高原の麓より
當地小込宮有り時の地頭島津大膳亮忠俊命を奉り
公お代りて謁謁廟の礼を致すと云うと見えたり△其神

△八田知紀説ハ神武
天皇の降誕坐し所ハ
高野原狹野の地也
同所神徳院の南ハ古
りてハ高う所う良
度く平り所うを大宮
の址なり云備たり
云う知り所ハ念

武天皇の御在り坐ける高千穂宮ハ一曰決水以狹野
 神社の地あり可事申すも更ありければ古高千
 穂と云ける地の方境廣大あり一事以を以知べる者
 小あり有ける後の日向風土記小宮城崎郡古先傳云
 此宮所也故云宮崎と有口訣小自瓊々杵尊至天皇
 坐日向國御崎之宮茅田御子磐余彦尊者神武天皇也
 於此御宇都建大和國橿原地と有其記小依一慢小
 書せる者あり可然れども神代り都ハ大臨薩摩の
 二國ありりれば此ハ在る事心屏すと雖も久し神
 代の間ハ事ふりければ御在り坐すと限りて云ハ
 きハ非ず今宮崎郡中村の北一里ハ神集山吹込奇と
 云有其八町東ハ半里四方の曠野有青松の群立
 たり森赤の中小神武天皇の御社有を相傳へ其都の
 古址ありと云て田畑の字ハ様と古名遺れりと云
 り又爰ハ天皇の御船ハ御さて給ひ所ありと云
 うとぞ何れハ一ても此を以て高千穂宮と云ハ

ハ此第一一書猿田彦神の對奉りて給ふ御言ハ天神
 之子則當到筑紫日向高千穂德觸之峯吾則應到伊勢
 之狹長田五十鈴川上と伊勢の事ハ上八百五十三下小注
 が如く皇太神の徑往鎮う御在り坐べし宮所を定奉
 りて給へるあり然して以高千穂峯を定めて此小皇御孫尊を路
 行奉りて給へるハ己ハ其初國所知食テ大宮所を豫
 め見立置て給ひて其地ハ進め申さて給ひけむ御事
 申すも更あり然然る小紀記の傳共を見り小此地ハ
 御在り坐り著せ給へるのこして直小吾田長屋豆狹
 之碕小行幸て其地ハ留りて御在り坐り趣ありハ其

始終を括り書されたり一者小て實小ハ其様田彦神
リ設備るル一任小具高千穂宮小任也御在し坐せむ
々と思ふ由有り其ハ中臣寿詞小皇孫尊波高天原 仁
事始^天豊葦原^乃瑞穂^乃國^遠安國^止平介^久所知食^天天
都日嗣^乃天都高御座^仁御坐^天天都御膳^遠長御膳^乃
遠御膳^止千秋^乃五百秋^仁瑞穂^{並^遠}平介^久由庭^仁所
知食^止事依^志奉^互天降坐^又後^仁中臣^乃遠都祖天兒
屋根命皇御孫尊^乃御前^仁奉仕^互天忍雲根神^遠天^乃
二上^仁奉上^互神漏岐神漏美命^乃前^仁受給^波申^仁皇
御孫尊^乃御膳都水^波宇都志國^乃水^小天都水^遠加^互

奉^止申^止事教給^仁依^互天忍雲根神^天乃^乃海雲^仁乘^互
天^乃二上^仁上坐^互神漏岐神漏美命^乃前^仁申^波天^乃
玉櫛^遠事依奉^互以玉櫛^遠刺^互自夕日^至朝日照^天
天都詔戸^乃太詔戸言^遠以^互告^礼如^波告^波麻知^波弱
菟^仁由都五百笠生出^年自其下天^乃八井出^年以^遠持
天都水^止所聞食^止事依奉^支之有^互以水取^の御政
ハ一々天降^り著セ御在^し坐^し直^小天上^の御水^を乞
小奉^りせ給^へる状^小聞^えたり小大同本記^小一傳^る
書^して其終^小即時日向高千穂宮^乃御井崇居^焉と有^馬
ハ右^の天^乃八井^の事^小當^り可^し然^る時^ハ皇御孫尊

の天降り御在り坐て高天原より授けり御在り坐さ
 せ給へる奇庭の瑞穂を初て所聞食て大嘗の大御政
 を行ひて御在り坐りける其高千穂宮ありし事鏡小
 係て見らるが如し然れば山小高千穂と云は右八百八
十二丁
 小注るが如く大鉦小鉦が故事小起り里小高千穂と
 云は城皇宮小御在り坐て初て天上の瑞穂を蔭植て
 奇庭小所聞食て給へる小起りて共小高千穂と云
 天子穂と云事小して瑞穂國と云は國号の大八洲
 小行渡る基本城小在り實小少縁の御事共小御在
 一坐するむ有ける上八百四
十九丁小注せる天津神天津

△神名式の例尋神
 社何座と有る其必
 一折ふ非、小有比
 小平霧島神社

磐境の御事多小克と城小合せ考ふ可き者あり
 白尾國柱云く日向國諸縣郡高原郷霧島峯神社今東御在所西所權
 現と号く東とい西霧島小對云ふ御在所と御坐所
 あり城地高千穂宮の四跡小係るを以あり城麓小御
 井川と稱ふ靈泉有る忍徳井の址と云傳即錫杖密院の庭に在りと云る
 然も有るが但右の高原郷小和名抄小諸縣郡財部
 云ハ次小留ゆる霧島神社の御事ふを別小一社有
 る事心得ずと雖も二座と祀り神を具片方を云ふ
 るや又同人説か高千穂宮の旧址ハ即霧島嶽の麓
 あり即諸縣郡郡城と云所あり此ハ本ハ島津莊の地
 あり南郷中郷北郷と云て三方ハ小分れて中郷の内小
 昔宮丸村都島と唱來り所の在り永享年中城を築
 きて即都城と号けり遂ハ一郷の名と成り伊知地
 り云いと云う事右八百七十九丁小築たり

李安と云人の神名式日向國諸縣郡霧島神社白尾
説少然有り國柱云く高城郡東霧島村ツマナリシムラに在り此地ハ高城郷と都
島郷との界あり奉祀伊弉諾尊相殿瓊二杵尊木花開
耶姬命彦火と出見尊葦不合尊玉依姬命神武天皇六
座を從祀とす以伊弉諾尊を主神と爲り事年頃不
審一と思へり一々とい大同類聚方五十五日日月茶
日向國諸縣郡霧島神社傳方元者伊弉諾尊傳方云
と所見たる小常陸風土記ハ瓦繁國日向二神之峰
と云有を以思ふか此ハ限らず諸國共ハ雄山雄山相
對して二上あり山ハ此ハ二柱御祖神を祀り事と所

見たり續後紀小義和四年八月壬辰日向國諸縣群霧
島岑神預官社三代實録小天安二年十月十二日己酉
授日向國從五位下霧島神從四位下と有ハ共ハ當社
の御事あり然る小右ハ注る如く別ハ霧島岑神社
と申す有り同人説ハ奉祀伊弉諾尊伊弉冊尊相殿六
座天照太神忍穗耳尊瓊二杵尊彦火と出見尊葦不合
尊磐余彦尊脇宮菊理媛命續後紀ハ謂ゆる霧島岑神
是あり按ハ霧島岑とい即今の東方の矛峯ハ是兩
所權現社の境内あり今權現祠壇在所高原郷麓より
二里山上小して石磴イシダガ三百六十餘級是より絶頂ハ至

る亦遠くくず續後記小卷と有る為歟あり又兩所
權現と稱するハ伊弉諾伊弉冊二尊を祀れを以る
社僧を錫杖密院と云ふ旧号東光坊云ふと有り今
思ふ小霧島神社と霧島岑神社と二社御在り坐すハ
右の兼和と天安との記され状の別あり小依て別小
一社を設たり一者の如く見ゆ然れども其祭
神を考ふ奉祀ハ伊弉諾尊ハ一相殿神ハ異説
有れども各六座ありを思ふ小本宮ハ別宮との二
ハ又ハ片方ハ伊弉冊尊の主と祀れり少て古
二社有る為然社号を云別てりハ有べとぞ思え

右の照宮ハ菊理媛神ありを思ふ小歟ハ伊弉冊
尊の主と為り御社ありハ加賀國石川郡白山
比咩神社ハ菊理媛神あり大鏡小伊弉冊尊と有
入媛神ハ其大神ハ奉り給ふ神ハ事傳十三
卷ハ十下小注り如くあり國柱云く照宮菊
理媛神号白山明神本社在加賀白山故名速玉之男事
解之男白山三所之中中為菊理媛神兩照為速玉事解
者寺記以爲兩童行者以歟也云り又未社狗人社左
大明命右火園降命其之外
支社數十所略之と有り又大隅國式外高千穂神社
國柱云く歟地贈於郡郷田口村ハ在り今西霧島宮と
云ふ西とハ諸縣郡高城郷小東霧島宮有小對云ふり
奉祀正殿瓊々杵尊彦火火出見尊箇尊不合尊神武大
皇 以上四神 東女宮右腋國常立尊高皇產靈尊伊弉諾
各為一座
尊天照太神 以上四神 西山王左腋大己貴命國狹槌尊
合為一座

惶根尊神皇產靈尊伊弉册尊素戔嗚尊正武吾勝尊以上
七神合以上六社權現と稱して本宮内陣に神像奉安
為一座の神藏六基有り瓊杵尊より神武天皇まで各一基
宛四有して其少宮山王社の左右に各一基合せて六ふ
り例祭年中數十度就中正月元朝神前の齋度小三の
神を敷き神人等以て立つ各手小眞神を以て四方小
向に米を散りて以て神代の故事とす祝詞有り社記
云上古の今の宮地より東一里十町瀬戸尾小在り延
暦中山上炎上の後小村上天皇御宇今の地小迄座有
り云云按瀬戸尾小在り時高千穂宮と云云

のや凡皇御孫尊を祀りて高千穂と稱せし例は日向
國児湯郡都萬神社の内小高千穂宮有し皇御孫尊を
祀れるおても知へし續後紀小養和十年九月甲辰日
向無位高智保皇神奉授從五位下三代實録小天安二
年十月廿二日己酉授日向國從五位上高智保神從四
位上と有り歟郡名を記さざれば詳あらずと雖も
瀬戸尾の東峯と西峯との間小在り時日向の國內
ありければ其かろ有つとむ取と云ふは實小然り説
あり今思ふ小東大宮の國常立尊意豊受大神を存度
之穂の事小就て祭れしを例の誤らある可く西

山王の七座ハ大己貴命の御在り坐ひむを山王七社の例ハ成り奉れりして左右共小本ハ一柱宛ありけいひ亦知べりし其相殿の神等ハ別ハ野神六社大權現在本宮坤半里許奉祀天御中至尊高皇產靈尊天照大神天万栲機千二姬命天忍穗耳尊玉依姬命以上六座相傳稱本宮御祖神と云れバ以て合せ祀れりしハ有べし又社記ハ左少將正五位下藤原篤如後一條天皇時爲霧島社務職治安元年辛酉三月廿一日一本作下十日向大隅國因掌神稅事謂其官所曰稅所と云れバ古ハ盛えり給へり事見奉り知べし又別社ハ天子明神

在本宮坤一里田口村奉祀蛭兒天忍日命天樓津大來目命以上三座と有る蛭兒ハ事代主神と混へたり可ハ大同類聚方小日向藥私注云高千穂藥共云是也大作宿禰守傳之奏焉云と有ハ以神小由有ハく思ハ又稻葉神社在同村奉祀木花開耶姬命倉稻魂命猿田彦神社記云太古木花開耶姬命爲皇孫ト定稻田之稻穗以掌之依其意法嘉禎年中橋本氏依神告ト定御影述求神田ト以今以田稻續續毎年八月廿五日爲新嘗之神供又二月初酉日祭奉備千種祭御田神と有ふり何れハ高千穂小由有ハ事共ありけりハ以西霧島宮を以て高智保神と云事甚し謂ハ有ハ御

事ハ不レ有レ也ハ然レバ同一高十德峯の神ハ御在
ハ高十德神と為テ上古一所の霧島神と一所
ハ知紀ハ右の国柱が説を諾ハズテ尚高智保神ハ白杵
郡智保郷有リハ其あリハ云ハ右八百七十九
丁ハ舉タル伊知地李安ガ文ハ七年日向国圖
田帳於白杵郡書高知尾社八町と有ハ小鷲さタ説不
の彼ハ七以の地名を各移セルリハ高十德神社と
云ハ何レ無クズレ可キ己小贈於郡の内ハ智尾名と
と云ハ高十德名を記少スル可ク其地の乳母神社ハ十
德神社ふリ可キ ○天降ハ阿麻久陀理坐伎と訓ベハ大
殿祭詞ハ天降利賜此食國天下登と有ハ如ク皇御孫
尊の御自物為リテ給ヘル由小孫テ申セルハ大祓
詞ハ天降依志奉支と有ハ同ト御事ふレドモ其天降
ハ給ハ皇祖天神の御方小係テ申ス所あルハ故ハ

阿麻久陀志と訓ベ事上八百六十五丁小注る離天磐座の
離字を波那礼と訓ヒ波那知と訓ヒの差別の如ク
以の御事を万葉十卷五丁下小以左加多能安麻能乃
比良伎多可知保乃多氣尔阿毛理之須賣呂伎能可未
能御代欲利と訓ヒハ阿毛理坐伎と訓ヒハ高以方宜一
 既而皇孫遊行之狀也者則自
 穗日二上天浮橋立於浮渚在
 平處立於浮渚在平處此云羽
 企爾磨梨陀毗邏而陀陀

日本書紀傳三十一

九百一

志シ而シ齋シ完シ火シ空シ國シ自シ頓シ丘シ覓シ國シ

行ト去リ頓ト丘ト此ニ云フ毗ト陀ト烏ト覓ト國ト此ニ

屢ル到リ於テ吾ニ田ノ長ナ屋ノ笠ノ狹ク火ノ碕ノ矣ト

其ソ地ノ有リ一ヒ人ト自ラ號ス事ヲ勝ル國ヲ勝ル長ナ

狹ク皇ノ孫ノ問フ曰ク國ノ在リ耶ト以テ不レ對ス曰ク

此ノ焉ニ有リ國ヲ請フ任ス意ヲ遊ス火ノ故ニ皇ノ孫ノ

就シ而シ留シ住ス

天神御子天降トセ御在リ坐テ高千穂宮小御在リ坐
テ舟庭の瑞穂を所聞食一初マセ給ハ大嘗の大御政
を執行ハセ御在リ坐ケル小依テ高千穂の名歟小起
リ歟トテ弘ウテ瑞德國ノ大弓の起ル所以ト亦歟ト
始レル由右八百九十四丁小注ルル如ク備歟件ハ其トテ後
小始終任セ御在リ坐イ宮都を定のマセ御在リ坐

較略ありけるが記記共小以同小餘事を載るれざる
が為小高千穂峯ハ天降る者也給ふを申すであら直
小笠狭の方小御在り坐らる状小見見ゆられども其小
既而と云ハ具事已小終り以事茲小初れる謂ふるを
思ふ少小高天原より行以下さ給へる大御政ハ其
高千穂宮の科度ハ此より行の也御在り坐りて
瓊々杵尊御一世の凡て御有状及御伴神等の各其
国々小別れて初国所知食ハ皇大宮小仕奉るれ凡
この御事共ハ次小久之と有る所小就て下り
奏し注し奉る可き者あり然れハ天上より傳り
大御政を高千穂宮小

て行ハ初さ給へる小笠狭宮ハ始さ給へる
小有る其御ハ其際ハ争てり小定の申るる
可き唯其御ハ世小係り○遊行之状ハ高千穂峯よ
見奉る外ハ無き者ありハ天浮橋小御立一御在り坐りて平素ハ幸行ハ此處ハ異なり
小笠狭の方小覓國小御在り坐る御消息を申すとして
御紀先小記の地出たの書る語あり口訣小遊行之状也者自高
千穂峯至小笠狭之碕道と有る如く遊刺行を伊傳麻須
と訓る事第一一書小所幸第二一書小遊幸崇神天皇
御紀七年小幸同八年小幸行景行天皇御紀十二年小追幸
不了作れたる共小其訓同一安しハ傳十百四十一
注るを見合す可あり○穂日ハ第一一書小日向穂日
高千穂之峯第四一書小日向襲之高千穂穂日二上峯

と有を茅一書ハ猿田彦神の御言ハ御天降の
所ハ亦古語拾遺瓦紫日向高千穂穂觸之峯と見え古事記ハ
日向之高千穂之久士布流多氣と有て穂日の穂觸
ハ活リケリ語不リ今以を分ち云所ハ瓦紫ハ大名ハ
して日向ハ其山の所在の回を云ハ高千穂ハ丹度
の穂穂ハ因て別ハ稱ふハ名ニトハ茅六ハ一書ハ日向
籠之高千穂添山峯と有テ添ハ同トハ西山相添ハ二
並ふを云ハ穂日又穂觸ハ其山の靈異有を云稱ふリ
古事記同生段ハ日向因謂豊久士比匠別と有ハ豊穂
日嶺別ハハ靈山ハ據れハ亦名あり可事傳六
二百

十七ハ注ハカ如ハ備久志備と云ハ例ハ四神出生章
日神の御生坐一時の御事ハ故二神喜曰吾息雖多未
有若以靈異之兒と詔給へハ由見え又茅五ハ一書ハ
吾田鹿葦津姬命の御子生坐一所ハ亦欲明抄抄有靈威
之威子等復有起倫之氣と有リ又清寧天皇前御紀ハ
大泊瀬天皇於諸子中折所靈異と見え古語拾遺ハ大
宮賣神と是太玉命久志備所生ふと有ハ更ふリ珠
盟約章ハ謂ゆハ熊野櫛櫛日命の御事ハ就ハ注ハカ
如ク歟ハ其御誓ハ依テ生坐ハ由ハ天穂日命の亦
名ありハ其神ハ鎮座ハ近江國蒲生郡馬見峯ハ旧名

奇日嶽云其神小依て山のり靈異有る謂ふる小
も思合可し又丹後風土記小共謝郡人家東北隅有
有速石里略先名天橋立後名久志濱然云者国生大神
伊射奈藝命天鳥通行亦橋作立故云天橋立神御寢坐
間外伏仍怪久志備坐故云久志備濱と有る久志備ハ
本より其と同ト云を以峯ふ天橋立有る所以也
合へれば然る似通ひたり故事の有を以て楳日又ハ
楳觸と云稱ハ二神の古より有つて事上八百九小
注るが如く其霧島神社の奉祀ハ其伊弉諾伊弉册二
神にて渡りて給へるもの思合可し御事ありけ

合訣小楳毛具礼牟
子也ハ有ハ且韓粟
こ物あり可ハ他ハ
然ル地名有る通え
り若て

但慶添楳囊抄九卷小日向国韓楳生村昔哥差武則
と云けり人韓国小渡り其粟と取りて殖たり
以故カ楳生村と云ハ云ハ風土記云俗語謂粟与區見然
則韓楳生村と云蓋云韓粟林歟云と有る楳生ハ久
志布ハ別あり△楳日ハ楳觸ハ活けりあれハ一ハ
思ふ可ハ同記ハ其峯の事を高茅楳楳生ハ峯と
有ハ比ハ同ハ久○二上ハ茅四一書ハ出たり常
陸風土記ハ瓦紫園國日向二神之峰と有を以て二上
の訓を知ら可し先中臣壽詞小天忍雲根神遠天ハ二
上仁奉上互神漏岐神漏美命乃前仁云と有る天乃
二上ハ高皇產靈神皇產靈二神の御在ハ坐す山あり
由其講美小注るが如く又淡路国の碓取盧島を見る
小今現ハ雄雄二山在て海中ハ並立るハ更予ハ神名

△檜上三上山母妹許
曾有末十二行ハニ
上ル隠経月之常惜
ヲ

式小謂由。大和国葛山下郡葛木三上神社二座大月
嘗の地ハ万葉二二六六小宇都曾見乃人尔有吾哉徒明
日者二上山乎家世登吾将見七六小有是是也今二上二嶽
トフタゴア二子山ト云テ二並あり又同式小常陸国筑波
郡筑波山神社二座一名神を史共小筑波男神筑波女
神ト有を万葉三三八八小朔神フクカミ之貴山乃倭立乃見果石
山跡神代從人之言嗣九二ト小衣手常陸国二並筑波
乃山乎云々男神毛許賜女神毛十羽日給而云々ト見
之同國十八社鎮坐記小所祭二座伊弉諾尊在陽峯伊
弉册尊在陰峯ト云テ即二上の謂あり又下野国河内

郡二荒山神社大神の二荒山を後小其音を取テ日光
山ト云事小在れども其小男体山女体山ト二山並
有を以テ二在フクラト云々ト二上小云小其義異ふ
ずあり有り又越中国射水郡射水神社大神ハ傳三
十百ト小注カ如ク二ト二社注式奥入小今二上
宮ト云るハ万葉十七四五五ト小二上山登妣古要底久母
我久理可氣理伊尔伎等又四七七ト二上能乎底母許能母
尔ふト有テ妣ト二並の山ありを云ふリ借以二上ハ
一七第六一書小添山妣云曾褒里能耶麻ト有テ口
訣小添山峯者二上峯云ト有ガ如ク雖山雄山相副

へるを以云稱ふ事右小峯なる例共小准る思ふ
可き者あり然るを平田史の二上を布多能煩理と訓
る者あり右の小引の常陸瓜土記の珠賣美萬命自天
降時高織御服從而降之神名綺日少命本自筑紫國日
向二神之峰至三野國引津振根之丘云事有引常
之丘美濃國神名記不破郡從五位上引常明神と
有是あり其二神之峰より移れし故や布けむ
同郡從五位上天二上明神と申すも有る証と為べ
きあり又同郡正二位真人大明神と申す有り其二
峯ハ能襲國あり古の真人國といふ有り其二上
亦申有り又大同本記の天村雲命を天二上命と有り
又丹後瓜土記の依て天孫降臨以前小己少天火明
命と共小降居給ひしを一度天上の参りて其侍奉神
と爲て天降給ひ又其水取り事ハ就て二度天上の参
上給へる趣ありけれハ其ハ天の八田知紀云云記傳
登命の義あり其ハ預ざる事ハ八田知紀云云記傳
十五丁下霧島山の正しく峯二有る二上あり凡て

古小二上山と云るハ皆峯二有る山ありと有ハ然る
事あり但高千穂の二上と云物古今の違有る事ふれ
と實地を踏ぬ人の難知きあり然るハ白尾翁の二上
者其山上二峯突^嶺東号牙峯絶頂建牙西号火氣布峯
即二上之一峯也火^火常矣後世於陷凹今俗呼其火坑称
御鉢と有る是古の二上あり然るを其二上の一峯矣
陷て火坑に成し後ハ彼牙峯^{東嶽}と韓國嶽^{西嶽}との
二峯相對して二上との成りあり其東面二上の間直
徑^徑壹里計あり偕又韓國嶽の半腹計りハ大波池と云
有り東西三百間南北二百間計あり其大波池も本ハ

一峯ありて謂ゆる若嶽あり上古の尖址外れは未陥ご
 かり間かハ韓国嶽と並立て二上ありけり事決然
 れば太古の時のハニ上と云物東西二所ハ在て殊更
 小作立たりけり状ハ二宛添まうけりけり以て依し
 思ふ小添山ハ然二宛添まうけり曾波理の山と云
 義あり可く思の略と云るハ甚疾ハ説あり其韓国
 嶽ハ贈於郡踊郷と云地方ハ在して一名雪嶽又西嶽と
 も云あり国柱云く以嶽極りて高し中嶺ハ上ハ草
 木無く白石焦土類垂て遠く望めば積雪ハ如く巖の
 半腹ハ添谷の地あり大波池と稱す湖水決りて

洪濤を起す故ハ名とす土俗云く是神龍の蟠居ヤる
 所あり其家ハ登る者噪喧を成し或ハ赤色ハ手拭を
 以て麾う飄す事を戒し若犯す者有る時ハ穿を覆
 いて風雨暴疾ハ及ふ愕然きて山下ハ下れば却
 りて白日青天と成る事往々有り云り有り神名
 式ハ大隅國贈於郡韓國宇豆峯神社見えたりハ其韓
 國嶽の神を祀れり云々
 七卷六十四丁ハ二十丁ハ注るハ如く丹波國赤田郡
 伊達神社式ハ見えたり其神ハ五丁極命ハ御在り坐
 を韓國伊太氏神と申す御事あり今宇津根村と
 云ハ御在り坐す田あり其宇豆峯と宇津根と言ハ
 等しきを思ふハ若くハ其神ハ韓國と宇津根と御在
 坐り古地ありハ有るハ右九百五丁ハ引り

○日本書紀傳三十一

○九百八

凡土記の韓槌生村の○天浮橋の茅第一書小日向
事と思ふ可らいふいふ ○天浮橋と有て其二の傳り如
襲之高千穂穗日二上峯天浮橋と有て其二の傳り如
く其高千穂(宮)峯一の笠挾之碕小渡り也御在り坐
才道小架れり橋ありか如し然る小古事記の趣カて
ハ高天之石位押分天之八重多那雲伊都能知和岐知
和岐互於天浮橋宇岐士摩理蘇理多ニ斯互天降坐于
笠繁日向之高千穂之久士布流多氣と有て天浮橋云
ニを天上ノ高千穂峯小天降りて給へる間の御事
と傳われり万葉十九三九一小蜻島山跡因乎天雲尔磐
船浮舟母尔倍尔真可伊磐貫伊許藝都追国者之勢志

氏安母理麻之云々と有て天磐船と云々天浮橋と云
々其御在り坐して通ひせ給ふ御料小云々ふれバ何れ
小しても同一ニを續後紀嘉祥二年三月奉賀天皇宝
篋満干四十歌小苗刺志天照国乃日宮能聖之御子曾
瓊葛天能梯建踐歩美天降利坐志と詠る小篋疏小天
浮橋猶言天梯山と注させ給へる也必兼る所有る説
小て天神御子の天降りて給へる梯の其高千穂峯小
架れり小て其一の笠挾之碕小遊幸イテる小其梯一の
御在り坐つゝむを古事記小ハ天上より二上ヤでの
事の小係の御記ハ二上ノ笠挾テの事の小

小孫ハハ五小其片方を略レル者ハ實ハ兩度
 共小同一御出立アリとこウハ見えたりけれハ諸大同
 本記小皇御孫命詔又從河道曾參上志問給申又大橋
 波須賣大神並皇御孫命乃天降坐手恐天從小橋參上
 止申時詔久後志恐仕奉事身詔天天牟羅雲命天
 二上命後小橋命止三名賜也と有を思ふハ小ハ二上小
 天浮橋と云ハ謂ヨハ大橋ハ又別ル地小
 在リありリ海宮遊行章ハ其火闌降命即吾田君小
 橋等之本祖也と見え古事記白檮原宮段小阿多之小
 椅君ハ有を口訣小吾田小橋者共姓也云々小橋者

彼所居之名と見えたれば小橋と云地ハ吾田の中
 小在ベク一其吾田ハ和名抄小謂ハ薩ノ國阿多
 郡阿多郷と有ル地小決メテ小橋ハ架リて在リハ
 小いを其神名小後小橋命と有ル其二上アリ大橋を
 前ト一其小對ヘテ阿多あり一を後小橋と云ふコウ
 ハ有ルめハ等を以テハ天浮橋ハ天上ト御往來の
 時ハ架れリ一梯アリを後ハ笠狭小遊幸ト時ハ其橋
 をハ休シて其地小御在一坐キひと同奉ル御事
 小ハ有リ記傳十五卷六下九下小云ク其記と彼記
 其ハ先天浮橋ハ天上ト往來ハ道の橋アリを書記
 小ハ自ニ上ト天浮橋と有ル心得ズ其記の趣ハ聞エた

日本書紀傳三十一

〇九百十

り云ふと云はたりと雖も古事記の恒一に非ず
此御記の悪しき非了共小其一ハ略りて傳ハ
りたり事と思漏る。○浮渚在坂云云
此云云尔磨梨ハ第二
一書茅四一書等々此と同文少平處ハ立て給ふ由
小流ヲ給へる故ハ口訣ハ浮渚海濱之平地と注セ
る始として何れも其意味ハ云事ふれども古事記ハ
ハ天上りの御事ハ宇岐士摩理蘇理多ハ斯互と有
を然る虚空ハ浮渚と云物の有べりしと非ず其上
蘇理多ハ斯互ハ反立而と云事ハ馬駕と小乗ハ七
平坦あり地ハてハ身を尋常ハ置る事ハ坂ハ
どを上下するハ必其形体を反ソラして其釣合を取

者此在ければ此ハ平處ハ反對の差有り然し
其宇岐士摩理の言ハ同一ハありければ不審ハ
思ふハ恐れれども御記の浮渚在元本ハ借字
ありつゝむを正字の心して書さ給へる可
れハ若くハ浮結ウキレニリ在と作て當れら字ありハ浮ハ万
葉下九三十一ハ小天雲尔磐船浮と有る是あり結レマリ在ハ神
武天皇三十二年御記ハ饒速日命乘天磐船而翔行大
虚也睨是郷而降之と有る如く天ハ衢ヒにて様ハ道
ハ有を一途ハ坂高千穂岑を的當として其御船の行
著セ給ふ方を定め給へる由あり可し今ハ俗言

△地を吾居處と定
るを給ふ云ハ船
ハ小乗ハ座を落
る事ハ平處ハ流
と云ハ坂と同義

小物を取て堅く磨く事志麻流と云ふ是なり
其例ハ流紀茅渟詔小後息事無久務結而仕奉止詔
之有結保子於屋敷の解志麻理也訓六茅第三詔
示弥務亦弥結而茅渟二詔小常典利益益願勤結理
奉侍亦見之類史弘仁十四年十一月詔亦夜志事
無久務志麻理伊佐平志文徳天皇實録三小日夜無
息事久務結利勤久仕奉亦依三代實録廿二小務志
万利伊佐平久亦有志麻理亦志婆理同小志
叙の事止取志婆理亦云云如く堅く夜間無く執持
下弛緩云意亦俗言也放逸亦者の行休の直り

一忠實亦成志麻流云此同言亦古事記清寧天
皇段の歌亦意富岐美能美古能志婆加岐夜布士麻理
斯麻理母登本斯有小大君の御子の茶垣八節結
廻不亦一茶垣と結堅め廻したるを云亦不葉
十二三下四小玉勝間安倍島山之又三十九玉勝間島熊山
之云云云共小玉勝間ハ島小係レ枕詞ハ籠の
目を堅く結ハ由の流ハありト云レ此ハ志麻理と
其の士摩理ハ專一ハあり者あり但其ハ予ガ説不也
下小宇岐士广理ハ下卷亦平群新臣の哥ハ大君の
御子の茶垣夜布士广理斯麻理母登本斯有亦斯麻
理同一ハ思ハ由ハ有リ云レ亦云北
其説を残されたる故小今予ガ思得ツ事ヲ書ス

の通澄小浮渚出相如大人賦漢書音義流沙中渚也
之有^ハ浮渚字を用^レれたる撰者の御心^ハ者明^ク事不
ガ^レ浮渚字岐士^ハ廣理^ハ○自^ハ穗日^ニ上^テ峯^ハ天上^ニ降^ル
浮島在^ル美^ハ非^ス○自^ハ穗日^ニ上^テ峯^ハ天上^ニ降^ル
セ^テ給^ヘる天浮橋の有^ル又其天浮橋^ハ笠狭之碕
小乘^移ル^レ御在^リ坐^テ了^ル由^ル○立^ル平處^ニ花^ハ陀^陀
而^レ陀^ニ志^ハ茅^ニ書^ハハ降^リ到^リ於^テ日向^ニ穗日^ニ高^ク穗^ノ之
峯^ニ而^レ齋^ニ實^ニ胸^ニ副^ニ國^ニ自^レ頓^ニ丘^ニ境^ニ回^リ行^キ立^テ於^テ浮渚^ニ在^ル平地^ニ
有^ル此^ハ天浮橋^ノ事^ヲ載^ルれ^ル故^ニ其^ハ幸^ハ行^ル
御道^ハ海^中浮渚^ノ有^ル其^ハ平坦^{ナル}地^ニ御立
セ^ル如^ク人^見ル^ル茅^ノ書^ハ到^リ於^テ日向^ニ襲^テ之^ル高^ク千^ノ穗^ノ穗
日^ニ上^テ峯^ニ天浮橋^而立^テ於^テ浮渚^ニ在^ル平地^ニ有^ル此^ハ同

小^ハふれ^ル何^レ小^ハ浮島^在ル^ル其^ハ島上^ノ平地
小^ハ立^セ給^ヘる趣^ハ自^レ天浮橋^ニ云^ハ縁^ハ無^ク
事^ハ古^ノ事^記カ^ル於^テ天浮橋^宇岐^土摩^理蘇^理多^ノ
斯^立有^ル右^ハ九^百十^ノ小^ハ注^ル如^ク浮^結在^ル反^立而^シ
云^ハ事^ハ虚^空了^ル降^リ給^ル必^ク大^ノ御^身を^反也
御在^リ坐^テ了^ル乘^ニ鎮^メ給^ル難^ク由^ル可^ク
以^テ獲^ル理^ハ枕^冊子^三九^十小^ハ思^来無^ク物^條小^物信^子
の反^顛へ^リ人^ハ懐^レ泣^ク也^云又^ハ同^ノ事
あり又^ハ記^傳十^五七^ノ一^ノ言^ハ史^記高^本記^ハ泥^行乘
積^見え^ル堀^川院^後百^首小^ハ初^御雪^降け^ル片^ハ荒^乳

山越の旅火橋小乗少て夫木十八が跡絶る荒れ山
の雪越の橋の綱手を引ず煩く少と有る橋を雪沖小
山坂ふぐを乗る物少し在ければ身を及不美に以
号けたる事右の蘇理多し斯互の謂ふ等十四の
然るを此の小具の及復少し立平處と云々天上よ
り其二上小降る也給へるが径ある故や天御身を及
して御も給へるを令將天浮橋の乗て幸行か玉
雖も同じ地上の事ありは禱ありけり陀毘羅
と云々其の及平の具幸行の時天浮橋小御也
御在り坐り御有状を申奉れ者あり故毘陀毘羅

ハ後撰雜三小押並て峯は平小成ふまむ山端無
月入るも有る平小常小云々平安あり
ハ非平坦の字の美あり今人の座と敷く倚
を平小座す又ハ平小居るあとの平小て以ハ具天浮
橋小御坐を平坦小敷せ御在り坐り其ハ平處平
地の字小就ハ○立坂云陀志ハ古事記ハ多
思ふ可りハ○立坂云陀志ハ古事記ハ多
互と有りハ洲起元章小伊弉諾尊伊弉册尊立於天浮
橋之上其第一一書ハ於是二神立於天上浮橋と見え
古事記小故二柱神立訓立云天浮橋有立立一小
て以ハ天浮橋の上小平坦小立せ御在り坐り其浮橋
ふぐ笠狭の方小御在り坐り趣能傳多斯
臣小万葉三小

因ハ愈ク固クの無ク實クたる由ルのリ借ヒ空ノ果ト云ハ例ハ海
 宮ノ遊行章ノ茅ノ五ノ一ノ書ノ小ノ茅ノ取リ兄ノ釣リ入リ海ノ釣リ魚ノ俱ニ不レ得ル利ノ空ノ
 手ヲ来リ歸ルと有ル空ノ手ハ得ヘキ物ヲ獲メセ給ハズシて
 御手と空ノ一ク為ラズ給ハズ由アリ景行天皇四十年御
 紀ハ日本武尊の於ニ是ニ聞ク近江國膽吹山有ル荒神即解劍ヲ
 置キ於ニ宮ノ篋ノ後ノ家ノ而徒行之と有ル徒ノ字ヲ一ク多牟那傳
 と訓スを古事記ハ茲ハ山神者徒手直取而と有ル又
 天武天皇元年御紀ハ何レ無ク一人兵徒手入東ノ有ルを
 多牟那傳と訓スハ記傳廿八ニ十ハ手空手ノ矛ヲ
 執ズ空ノ手ヲ午ノ也ト云ハ北ノ也ト如ク又其

訶志比宮段ハ興軍行向之之時赴喪船將攻空船と有
 空船ハ中古小人の乘ズを空車と云ハ如ク兵士
 の無キ休ハ社立たリあり万葉ニ十五十ハ於ニ煇呂加
 尔ハ許呂於ニ母比且牟奈許等母於ニ夜乃名多都奈と有
 牟奈許等母ハ空子共ト云ハ事ハ先祖ノ功名を失
 不レ云ハ爾無那ト云ハ右ハ引ク神功皇后御紀ハ字
 都祁多流と云ハ用ハ給ヘル無ク實クノ字ノ美ハ小克
 合ハりレバ古人の不レ穀ノ地又不レ毛ノ地を以テ注ス
 此ハたリ實ハ然ル言ハり借ヒ古事記ハ於ニ是ニ詔ス之以地
 者向韓國真末通笠汝之御前と有ル記傳十五ハ十三ハ

以處の文ハ必於是齋肉韓國眞来通笠汝之御前而詔
之云々と有けむを詔之以地者の五字錯れし上小移
り齋字脱り肉字ハ向小誤れり者あり故今ハ其如く
訓取意取有て其訓を改めしハ然る言ふて以ハ必
し其如くふくざれば高千穂峯小直小大宮敷と給
ふ御事と成りて笠狭之崎小在る故事ハ無く如く成
れハバあり然して其韓國の事をハ記傳ハ韓ハ借字
小して空虚國カラクの義即書記ハ謂ゆる空國あり凡て物
の内ムナシの空虚ムナシくして實の無きを加良と云ふ設あども
其意ムナシありと云れし以ハ然る言ひて傳廿六百三ハ

注るが如く海外諸蕃を凡て加良と云も右の意あり
草木の生氣の亡ふれるを枯カレと云ハ水ふどの絶るを
涸カレと云し以小同トく以海宮遊行章第一書ハ入山
覓獸終不見獸之乾迹カラクと有る乾迹カラクハ空迹カラクと云小異ふ
くざるを思合す可し然れば右九百小注る今四二
上と云ふ東嶽矛峯小對して西嶽セトあり韓國嶽ハ背肉
小當る所ありハ以を云り儲又古事記大牟神の御
子等小韓神曾富理神と申す御在り坐小就て傳廿六
百五下百五小注るが如く韓神ハ大己貴神大己貴神大己貴神ハ坐し
曾富理神ハ園神大己貴神大己貴神の御事あり小以ハ韓

国嶽と云有り又以茅六二書小日向龍之高千穂添山
峯と有小添山云曾褒理能那耶麻と見えたりを思ふ
小猿田彦神を啓行小奉りて以神山小天神御子を
天降し奉りて給へる御事實小大國主神の御心小
御在し坐りて以至りて明るの奉る小至れり
甚心欽事事小右九百八下注るが如く神名
宇豆峯神社正一五十猛神小坐りて思ふり同
郡大穴持神社有り又地神本記小謂由事代主神の
子天日方奇日方命亦名阿由都久志屋命と申す阿由
皇御孫尊の大宮敷坐り地名ありふど大由有り
事共あり猶上八百八十四下注る日向風土記の
大鉗小鉗と云ふ二神ハ必事代主神御父子ありいと
思ひあど甚く妙奇○傾丘云毗陀烏茅二二書
し諸れ有る事ありい

第四一書等小出私記小比太鳥鳥と有り以毗陀の
例ハ雉之傾使の事を云として上九百七下注るが如く一
向小佐を雜へぬあわし單と云小乃小異ありさるか
り丘ハ鳥と訓べき由ハ傳廿三百四下小委一と云るが
和名抄山谷類小丘礼注云上高曰丘音鳩和又岡丘
也正作崗と見えたりハ傾岡と云小同トあり即高
千穂穂日二上峯山の尾の打延て西方笠狭之崎
小至りて傾物山積を傳ハセ御在し坐り
故小自傾丘ハ云あり以字の事小就て記傳十三下
三小書記小比多袁を傾丘と書るハ訥徑衛風小至り

頓丘ハ毛萇傳小丘一成爲頓丘と云ハ前漢地理志小
頓丘縣屬東郡顏師古注小以丘名縣也丘一成爲頓丘
謂一頓而成也と云る小依小速小成れる由と聞ゆれ
バ小丘を云ふり然レバ彼頓丘小比多哀の意有る事
無し君ハ一成と云注小依て取れること云べけれ
ど彼一成のハ一度の意比多ハ純一ハ倚る意有れ
バ同トウズ且御國の上代ハ一度ハ成りて成れり
と云ガ如き意を以て比多哀と号けし事有べし非
ズ小丘ふらバ直小丘と云べけれ即賦記の
歌小丘と云事有る故思ふ小書記の頓丘ハ詩経

の字を取れるハ非で頓ハ唯比多と云言小用ふる
字を書るハ偶詩経小然る名の有る然レバ書記
の注小丘を小丘ふりとも小山ふりとも云るハ詩経
小因れる者ハ非あり下と云れしハ然る言ハて頓
丘ハ右小丘と云る如く山脉の續きて一向小岡ありと
云ハ襲突之空國と云ハ其頓丘と云べき地ハ本より
無實ウツケハた由を云る者小あり有り又記傳ハ比多
あども同意少ク片奇れり固る可レと云れたれど
も其ふらむハ唯小丘と云るハ書レハ可らりけ
ル殊更ハ近遠あり頓丘ハ字を何レ用ハらば給らむ
○誅小頓丘小丘也と有ハ右ハ如く非ふら小釋ハ
頓早也早嶮也言嶮岡也○覓岡云矩貳磨儀ハ茅二
と云るふぞハ弥當らず

茅四等二書と然り古事記ハ真末遍笠沙之御前而
と見え万葉ニ^五ト小於保久米能麻須良多和乎
佐吉尔多互由伎登利於保世山河乎伊波祢左久兼互^美
布美等保利久尔麻藝之都ニ有ハ以御事を詠ふ
り纂疏小覓国者求覓可都之邑也と注させ給へり
如ハ以覓の事ハ傳廿三^二ト小云り振津風土記小住
吉大神現出而巡行天下覓可往国と有るハ唯小覓
国と云くハ一等委ハ者なり伊勢物語第九段小
小ハ在下東の方小住べき国求メ小とし昔男有けり云ハ京
行けり云ハと有る其意ハ亦以小同ト○行去以云
騰褒屢ハ右小引り如く古事記ハ通字を被用たり

即右の山河乎伊波祢左久美互布美等保利久尔麻藝
之都と有る是あり古事記遠飛鳥宮段小志多と尔
母余理泥氏登富礼と有る其傳廿九^四ト小下ト小ハ
倚偃而行去^{ヨリ}と注され又阿加斯互杼富礼^{ヨリ}ハ令明
而行去れふりと云れたり又皇極天皇二年御記^紀小渠
梅多你母多礙底騰褒羅栖と見え万葉十一^五ト小石
尚行應通建男と有り又九^八ト小釣船之得乎良布見
者と有る乎ハ假字違ハりと虽も右の類例あり新六
帖四小荒山の通り習ハぬ岩傳ハ手向の神小任せて
行く夫木四小風を痛ハ響の灘を通り日も岸の櫻

小目離やハ鳥ヲ拾玉四小朝者日刺や高根の山路
 通ルぬ峯小出ル鹿の音源氏葵ト小物も見て飯
 むと為給へど通り出む隙も無き小野分ト小中の廊
 通リ通リて参給ふ枕冊子五六局ト小行ト程も人の
 居並給へるを通り行けば九ト小遠ト程ハ得も通
 る事ト見ゆ行先を迫る行以て行げば然ト非
 かつころ可愛トけ北宇治拾遺二小今日ト通
 りて明日通ト思ふありト又三唯通ト通トり通トり
 むと鳥トを云ふふと云り紀傳十五小通トハ書紀
 小行去ト云騰ト復ト屢ト有ト字の如く通り過て往あり

備以處の語の都ての意ハ其鎮坐ト可トき國を覓め給
 ふとして齋肉の空虚地トを通過トて笠沙之御崎ト到トり坐
 るありトと云れたる實ト然トる言ありト又其ト卅九卷ト四ト
 神代卷ト小行ト去トと書ルト如く行過トる事あり俗言ト
 ハ某處トを行トと云事を某處トを登ト富流トと云へども唯行
 と云れりト○吾田トハ坂ト小故皇孫就而留任時彼國有
 美人名曰鹿葦津姫トと有トて細書ト小亦名神吾田津姫ト
 所見たりければ此神名トハト坂地ト小因トて負坐トる不
 るを彼國トと云トハ古小吾田國トと云トハトころハ有トけ
 め坂神名ト茅ト二ト一書トハ吾田鹿葦津姫トと有トり吾田ハ
 國名を冠たトハトて神名ハ鹿葦津姫トなりト其ト第六ト一書

小引到干吾田笠狭之御碕遂登長屋之竹島乃巡覽其
地者彼有久焉略中又問曰其於秀起浪穗之上起八尋殿
而半玉玲瓏藏紅之少女者是誰之女耶答曰大山祇神
之女等大號磐長姬以号木花開耶姬亦号豊吾田津姬
之所見也其海中亦係吾田国と云一事を曉る
可一海宮遊行章小其火闌降命即吾田君小橋等之本
祖也古事記小集人阿多君之祖と有り又神武天皇
甲寅年御紀小吾田邑吾平津媛と有を記小阿多之
小橋君妹名阿比良比賣と見えたり和名抄郡名小
大隅国始羅阿比良御名小同国大隅郡始騰熊毛郡阿枝

△薩大回日置郡
合良脚有是を云
備

と有る是あり可きが吾田邑ハ其住坐る地の事あり
右の始羅をてを係し吾田国の地ハ非る可一安開
天皇二年御紀の安開国をバ薩摩国阿多郡と云注ル
有れども其ハ別の事あり其の例ハ引べり
雖も天武天皇末鳥元年御紀ハ大隅阿多集人と有と
見ハ其時未薩摩国の名ハ無して阿多国と云一状ハ
て持統天皇御紀元年小集人大隅阿多魁帥と有る集
人ハ衆の名あり大隅と阿多とハ二国の名を並云事
ハ其六年閏五月小詔筑紫大宰率河内王等曰置遣汝
門於大隅共阿多可傳佛教と有る以て著事なり

然る小續記小大宝二年小先是征薩摩人時云々唱
更ヒト国司等今薩摩言云々有て以時ハ唱更国云て
を其記を撰る頃小至りて漸薩摩国と云名小定り
たるあり御記小所見たり所右の如くあり小自尾国
柱説小吾田国と云るハ今の薩摩の旧名ハて後小太
隅阿多と並云ハ今の谿山日置指宿禰指娃指の南
辺ちての地方ハて皆安閑天皇御記の阿多國の疆城
と思ハる南浦文集小琉球那霸本是川邊郡と書セ
し諸國ハ所有と見えたり然るハ又七島以南の海島
小較其管轄小係りハや和名抄小川辺郡鷹屋を阿

多郡小收入たるハて古の阿多ハ郡ハ甚大火多り
を知べし東鑑建久三年條小薩摩国阿多四郎宣澄所
領谿山郡伊作郡日置南郷北郷ハも見え又伊作莊日
置北郷兩地日島山野河海檢断所務の事有り又阿多
平權守忠景依蒙勅勅逐電干貴海島と見えたり阿多
と稱セハ以等の地小住址セハ故ふれば後ハま
でハ大名をバ阿多と稱セハりけりハと云るハ尤ふ
り説ふハ但阿多和名抄小阿多郡阿多郷有る即其国名の
起るハ可ハ事云ハ更ふり以名義ハ次九百三
く注ハ可ハ但安閑天皇二年御記ハ阿那國を以吾田
同ハと云ハ古ハ説ふれハ非ハり其文ハ

△菅原記下巻備後
同の事を云ふ小葉田
郡屋之國即此居等
公也之有北古小穴田
に云一八今の安那郡
州草田郡下小保
北小こ

備後國後城屯倉多祢屯倉末履屯倉葉稚屯倉阿音屯
倉柳回膽殖屯倉膽年部屯倉と有を小寺清之り花
牛餘啼之云書小右の備後國ハ備中國を誤れりふり
備後ハ國造本紀ハ吉備之國ハ備品治國と云れハ以
備後ハ備後ハ備後ハ備後ハ備後ハ備後ハ備後ハ備後
中國後ハ備後ハ備後ハ備後ハ備後ハ備後ハ備後ハ備後
村備後ハ備後ハ備後ハ備後ハ備後ハ備後ハ備後ハ備後
ハ小田郡大江村ハ在り今波良加と云ハ河音屯倉ハ
後川郡江原村ハ在り今加夫登と云ハ阿那國ハ備後
國安那郡ハ在り和名抄ハ夜須奈と訓ハ音を訓ハ替
て後ハ唱たり故ハ膽殖屯倉ハ小田郡大江村ハ伊夜
り地ハ是ハ故ハ膽殖屯倉ハ小田郡大江村ハ伊夜
云有り是ハ故ハ膽殖屯倉ハ小田郡大江村ハ伊夜
次存登志和氣王若因無子命為子代定伊登志部と有
是是是是是是是是是是是是是是是是是是是是是是
境を接する地ハ小田郡出部村ハ今ハ三宅の姓多しと
云ハ右の阿那國ハ吾
田郡ハ一書ハハ到干吾田笠狭之御碕遂登長屋之竹
り第ハ一書ハハ到干吾田笠狭之御碕遂登長屋之竹

△惣れ吾田ハ國名長
屋其地ハ徳島也
又竹島ハ谷小名

〇竹島ハ事ハ四百
四十二下ハ事ハ如被
竹力ハ事ハ備後高
屋の名起れり
山ハ高島ハ屋之
下ハ事ハ一詔ハ
る笠狭ハ事ハ
りハ其笠狭之
御碕の内ハ山ハ
可

島と有別^ウの地^ウの如く見ゆり白尾國柱説ハ長
屋ハ蓋長永山と云る是なり以山ハ河田郡加世田郷
大浦村ハ長く延なる高山あるガ加世田の御碕ハ
横にハ辰己方ハ疑^類姓郡枚聞獄と見え故有ハ
き地方あり備後長永とハ旧長屋を長江^{ナガエ}と訛り即
長永とも書成り今ハ字音ハ轉り呼ぶ事と思ハ
以山ハ笠狭の崎ハ横にハ同ト所あるを以て長屋
ハ笠狭とハ云ハる可ハ其ハ譬ハハ龍之高千徳峯
かどの例ハ今ハ俗ハ加世田の吹上と云ハ如ハ
云ハ國人の説ハハ恒ある事ハる可ハ〇笠狭之

△可一然云所以

碕ハ第四一書第六一書ハ笠狭之御碕と有ハ依テ割
ハ一古事記ハ七笠狭之御前と有リ口訣ハ笠狭之碕
宮崎也ト見ヨ白尾国柱説ハ笠狭之碕ハ河辺郡加世
田郷有ル是アリ其加世田ト云村名ハ即笠狭ト云轉
リ一名カテ佐トノ反テ世ト成レテ有リ下小田を附
タリハ笠狭ノ地を後世小田所小開キ一ト云笠狭の
田トハ呼ビ有リ笠狭ト云ハ坂辺吹上ト云ハ限無
キ西海ノ大洋ト云白沙を吹上ツテ歳々積リ重リテ
然ルガト云立陵を成ルルハ重沙カサの名ハ昔カサ物
積重ルルを今ト層カサの上ト云又ハ層有ルト云云云

ト云云ハ八田知記其を語ヒテ笠沙を重沙と云ト説
北一ハ被名立ト吹上ノ状ト云思寄レ一有リト云橋
東逸ガ西遊記ハ日本第一の吹上ありと稱美セ一不
リ吹上ノ廣大多ク事ハ加世田郷ト云北ガト云伊
作郷田布施郷永吉郷日置郷伊集院郷市来郷串木野
郷ト云ハ郷小係リテ凡十里餘一目ハ見渡レル廣ク
ハ一里小過ル所有ヘク高キ所ハ山の如クト云松樹
限無く生タリ是太古の時ト然有リト云ト云
トハ然ル言ハレ予ハ先年彼国ハ物為ナリト云ト云
地ハハ得到ルガト云ト云ト云ト云ト云ト云ト云ト云

見渡したる状實小其云るが如くして恰も白雪の積
りりと思ふ計能因歌枕小加佐の野と有り
志野と有る後の誤寫多由云り記傳十五卷八十五
下小國人云今阿田郡小加世田之御崎と云處有り其
地小様きて宮崎と云所と有り ○其地ハ茅四ノ一書小
ハ彼處と見え第六ノ一書小彼と有ハ上小乃巡覽其地
と有る為あり其ハ曾能久迹亦と訓へし右小諸由
吾田國の事小して第二ノ一書小國主事勝國勝長狹と
有を以て古小其辺を區別して殊小國と云し事を曉る
可し ○有一人ハ茅六ノ一書小有ハ人と有て訓を同く
す茅四ノ一書ア二書小有ハ一神と有ハ取て一柱神有理と訓べ

き事瑞珠盟約章所有一神号羽明玉の例の如し ○事
勝國勝長狹良海平小命の二字有り第一書小其事勝國勝神者是伊時諾
尊之子也亦名鹽土老翁と有て實ハ混ぶ方無き傳
ハ見えたりけり其ハ異なり説ふに有けり御鎮座
本縁小狹長田号事勝國勝長狹也之後田彦大神と見え今一所
ハ狹長田之後田彦大神と有て細書小宇治土公氏
入遠祖神也号事勝國勝長狹亦是也傳記古事入小事と書と海せり其の
あらず神宮の舊記の説皆然るハ其御紀有ての上の
異説ありけりハ其ハ必承る所有へくふに有けり
其のゝあらず口訣小長狹者岐神也と有ハ彼道祖神

の謂ハ非ズ以テ第一書ハ猿田彦神の皇御孫尊を
天八衢ハ侍迎へ奉りて給ひし所以ハ依テ（岐）衢神と
稱申せりと其創意ハ相同トキ共ニありしハ其ハ就
て疑三有りハ一ハ以テ小女神名の始テ出ル所ハ伊
弉諾尊の御子の由を注ス可ク二ハ若シ其ハ御子ありハいハ
て不意ニ出ル事疑ム可ク一ハ二ハ若シ其ハ御子ありハいハ
ハ先ハ小生坐リ傳有へキ然ル事疑ム可ク一ハ三ハ
ハ鹽土老翁ハ良海本ハ神武天皇甲寅年御紀ハ以
云注言大神と有ハ小女を領地と為給へル事疑ム可ク
若くハ是古傳トハ云ハあリ一家ハ私説ハありハ者ハ

ウハ一ハ小ハ非ズウハけルハヤ柳猿田彦神と申すハ傳三十
十 百 上 八百五 小注セルハ如ク味耜高彥根神ハて
渡リて給へル小猶徴ト為へキハ傳三十一ハ十六ハ十ハ注
ハ神名式ハ謂フハ陸奥国白河郡都ハ古和氣神社ハ名
大を頭注ハ味耜高彥根命と有リ白河故事ハ云物
小都ハ古和氣神仕南郷ハ槻村一宮記ハ曰高彥根命ハ當
社別當大善院所傳縁起ハ曰大日本武尊東夷征伐ハの所
ハ滿山の戰場へ出現シ給ハ加勢ハの三神ハ向足惶根事
勝國勝長狭命三柱ハありハ日本武尊ハ其ハ勸請成シ
給ひぬハ見えたるハ向足惶根ハ道祖神ハの事を東諸ハ

△日女と茅二書と
少事勝國勝長杖
神有て猿田彦神の
名三々茅一書と古
事記猿田彦神の
有て事勝國勝神の
名並三々茅二神の神
の坐故事勝國
二神下猿田彦神の
下小宮に在り

せ給へる後小皇御孫尊の御在り坐りければ此地を宮
所小奉置して伊勢小置りて御在り坐たる可く然れ
ハ茅一ノ一書小果如先期皇孫則到筑紫日向高十德捷
觸之峯と有ハ具御天降の始を云ひ次小其猿田彦神
者則到伊勢之狭長田五十鈴川上即天鈿女命隨猿田
彦神所之遂以係送焉と有ハ其神の始終の括ふる小
て此小宮所を奉りて給ひて退坐る所の御事と所見
たう儲味非高彦根神と事代主神との本傳之和魂小
坐せば別神小の御在り坐ざるを地神本記に依り替
ふる小素戔嗚尊孫都味齒八重事代主神三世孫天日

筑紫日向高十德捷
日向高十德捷
日向高十德捷

方奇日方命 赤名阿田都 久志屋命 此命(袋)娶日向賀牟度美良姬
生一男一女と有ハ阿田都久志屋命と申了阿田ハ
此小謂ゆ吾田吾田事上ハ百ハ大鉗小鉗の事小就
て委りて注るが如し然して古の妻を娶る小女の家
小住む習ふりハ(此)命と即此地に御在り坐けい
事論と待ず又大田命と申る小日向和名抄諸縣郡大
田郷有ると共小由有る事なり又其八世孫阿田賀田
須命と申すは後小其祖先の録小因て此吾田國を以
を以て名を負れし者と所見たり此等の所以限りし
うらざりを以て事勝國勝長杖神ハ即猿田彦神ハ

て即味船高彦根神の御在り坐て先小国土を避奉り
せ給へども其皇御孫尊の初國所知食ひ天宮地を奉
りて給ひむ為小豫日此地をとりて御在り坐り、御事
かおひ有ける其日向賀平度美良姫と云名心得り
すじを係て云る國名を賀平度美良姫と云名心得り
の神門郡ハ上四百十六丁ハ爪土記を引て注々如く
後ハ其子健飯勝命を以命娶出雲臣女子汝麻奈姫と
布と此雲臣語ハ依小伊佐我命の女あり其九世孫大
日田祐古命ハ以命出雲神門臣女美良姫為妻と有る
是鷲澤淳命其子伊賀曾熊命其子美良姫命と見えて
大神氏ハ世々出雲臣の血縁あり然る時ハ右ハ美良
姫ハ天夷鳥命の女伊佐我命の妹と云り又三代實録ハ仁和
日向小嫁りれバハ一若ふ可ハ又三神門島神從五
元年二月十日丙申後伊豫國正六位上神門島神從五
位下と有れハ神門島と云有り日向と對へる國不北

由有若て事勝國勝長狹と申す名義ハ事ハ事代主神
と申す御名の事なり國とハ大國主神と御名ハ稱申
す國ハ物と云ハ通ふ事其和魂を大物主神と稱申
すを以て知べきあり勝ハ事ハ物ハ卓萃と云
給ふ謂是なり第一一書依田彦神の所ハ時有八十万
神皆不得目勝相問故特勅天鈿女曰汝是目勝於人者
宣社問之古事記ハ汝者虽有手弱女人其伊牟也布
神面勝神と有り以目勝面勝共ハ眼光の人ハ卓萃ハ
面貌の人ハ超越給へる謂ふハ合せて事ハ物ハ
卓萃ハ徳の御在り坐り由ふルハ誰神ハ御在

一坐む天下所造り大神の珍御子事代主神の御上
小奇異しき事ならず契合へりける古事記の所見たる
大國主神の御言小赤僕子等百八十神者即八重事代
主神為神之御尾前而仕奉者違神者非也と申給ひ
第二一書小大物主神事代主神の諸神を帥て天上小
昇給へる所の天神御言小宣願八十萬神永為皇孫奉
護乃使還降之と有る大御命小合せて御天降の啓行
ハ更ふり以都定の御事小至りて萬の御心の残り所
御在り坐すりて以仕奉り給へる御所為の程を仰
奉り知べき者不り備具長狹と申す義未詳あり故

強て攻る小長と高と言相通ひ佐と世とい本し同
行の音あり常小長一短一と云小高一短一とも云小
例に布けれバ高兄タカニと云事あり其事代主神の御本名
を味根高彦根神と申し又出雲風土記ハ根の言を
略きて阿摩須根高日子命とも聞ゆる高日子と同義
の言小いい有るい即大國主神の長子ありて渡り給
へれば御自御名兼坐るい然申させ御在り坐む事
實小理有る御事小あり有ける若し以小皇御孫尊の
后神と召れ奉給ふ木花岡耶姬命ハ大山祇神の
御女小渡り給ひて以り吾田と云ふ地名をさへ小

皇馬ハ茅ニ一書ハ
ハ許ニホク訓ト通証
ハ今ハ梅ハ爲シ小雅ハ鳥
ハ詩ハ於テ馬ハ春ハ杖ハ情ハ昔
ハ鄭ハ馬ハ依テ國ハ詔ハ馬ハ作
ハ塚ハと見エタリ

在也との之有り即大宮決定させ終ふ可き地有り
 御對を奉らせ給へる小て以吾田長屋至狭之碕小啓
 行き奉りて述る言と所見ハ也。○任意ハ御心能麻尔
 麻尔と訓べしハ私記ハ小以二字を引合せて麻尔とハし
 訓たり其ハ万葉二ハ十一ハ小梓弓引者隨意依目友三ハ十三
 五ハ小大王任乃隨意九ハ九ハ二ハ小死毛生毛君之隨意ふど
 見えたれハ然訓中トハ非ハズと雖ハ以ハ具ハてハ
 言足ハざるハかり宝鏡問始章第三ハ一書ハ小隨衆神之意
 又ハ後記大同二年九月詔小巳ハ呂能麻丹眞ハ有ハる
 例を立て訓べき所ハる者ハなり○遊之ハ美多勢登麻

袁斯伎ハ訓べし海宮遊行章第二ハ一書ハ小未意ハ有ハる
 未字を美多勢流と訓し其茅四ハ一書ハ小向未意ハ有ハる
 ハ未字を伊傳麻勢流と訓たるハ小ハ其意知ハるハ小
 天武天皇元年御紀ハ不到大野以日落也山時不能進行
 と有る進行を美多須流と訓たり以ハ等ハを合せ見ハる時
 ハ美多須ハ御到良須と云意の古言ハる者ハあり其事
 勝國勝長狭神の主領ハる以吾田國ハ御意の隨ハ到ハる
 也御在ハ坐ハべしと申せりハ小ハ即其國を奉ハらせ給へ
 るハふり茅四ハ一書ハ小隨勅奉矣と見え第六ハ一書ハ小對曰
 是長狭所住之國也然今乃奉上天孫矣と有る是ハふり

移

口神名式小正江國
高島郡水尾神社
二座子名神大月
次新嘗と有と頭
注中後田彦神天鈿
女命二神多由書
り其高島郡と
云ハ第六二書小註
少(留)長屋之竹島
の地名と教也小
非る考ふ可

△就少口訣小就
長狭之中一御座也
二有ヤ一〇

若下城猿田彦氏日方神ハ一右九百二小注三如イ城時
小其任也御在坐一國を皇御孫尊の大宮処小奉り
置下下伊勢國小赴りて給ハ城小就ハ天鈿女命三
其處小送聞えさせ給へりけり其事委一ハ傳卅二
百 十 小注下可一 是神宮の古書共小其事勝回勝長
小坐と云ふ傳の遺れケ所以あり者ふり然れハ茅四
一書小城神を一ハ伊弉諾尊之子也亦名監土老翁と
有ハ後の書入の本大 ○番任ハ他一ハ到りて其地と
と成れり事灼然一ハ 〇番任ハ他一ハ到りて其地と
得下任を云ふ由上 百六十 小例を奉て注せるが如一
五下 儲政をハ茅二一書小ハ時皇孫因立宮殿是為遊息茅
四一書小ハ故天孫留任彼処ふと見え古事記ハ朝

日之直刺國夕日之日照國也故城地甚吉地詔所於底
津石根宮柱布斗新理於高天原冰椽多迦斯理而坐也
之見えたる是古言の任ハ一ハ殊小委りき故小注下
可一其朝日之云と夕日之(一)云くと云ハ上古ハ宮殿
を造りて給ふハ日影の物小障りれずして刺す地
を賣させ給ふ常あるが城ハ殊小天上一ハ天降り御
在坐一故小其御祖國を意慕ハ奉りて給へるを以
て其賣させ給ふ御心將深く御在坐けり者あり然
一ハ傳十五 五下 廿二 百三十 小注三 如く世中小現
二一知れ活三一生る神ハ人ハ皇祖天神の産靈ハ資

て産生る者あり在ければ生の始死の終共其高天
原より顕國小終始する者あり故其人の身小取て天
日計り意しく慕ひし物ハ非りけり其證ハ家居る
ども作構ふる事ハ更ハ云ず假初ハ外へ出る時
ハ何の用と云事ハ無して不知く天日小打向る事
誰ハ常ふるハ右小云り如く生の始死の終ハ所不
るガ爲あり但ハ正ハ正ハ人の上のこハ禍神小交
りて黄泉國ハ逐る可く者ハ此及了て白晝を燈ハ幽闇を好む者ハ十有之
こ者ハ如ハ可くハ可くハ有ける大被詞ハ如此久
依左志奉志四方之國中登大倭日高見之國平安國止定
奉氏下津磐根尔宮柱太敷立高天原尔千木高知氏皇

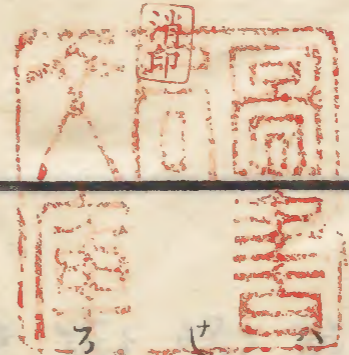
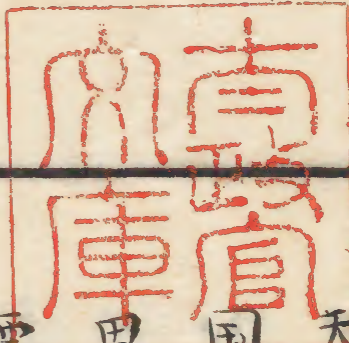
御孫之命乃美頭乃御舎仕奉氏天之御蔭日之御蔭止
隱坐氏安國止平之所氣知食武之有ハ本ナリ以時ハ御
宮造の御事ありを中洲小都一給ふ後ハ以詞を被
用る故ハ大倭字を加ふれたるハ唯日高見國
朝日夕日の直刺す事を稱たる者あり記傳下五
ハ下引れ朝倉宮殿歌小麻岐牟久能比志呂乃美夜波阿佐
比能比傳流美夜由布比能比賀氣流美夜太神宮倭式
帳ハ朝日未向國夕日未向國龍田風神祭詞ハ吾宮者
朝日乃日向処夕日乃日隱処ハ如ハ朝夕天日の
刺入る事を賞るハ上古の例ハ右小注る如き

謂れ有を以ふり 右小粗云り一如く禍神小相交これ
 逐ハれ奉る者 ハハ故小天日の御照し坐す所を厭
 ひ幽闇の処を避し物有る事共の多きハ更あり 夜陰人の知さるを待て邪惡の事を行ふ是己ハ天上
 復命して神と成る事を己ハ 復命して神と成る事を己ハ
 ひと為を機を 朝日之直刺国とハ山崎ふどの阻障
 者無して直小朝日の刺来る地を云あり直ハ神武天
 皇戊午年御紀小瀬流而上徑至河内国草香邑青雲白
 扇之津古事記同段歌小哀登賣尔多陀尔阿波牟登景
 行天皇四十年御紀日本武尊御歌小鳥波利珥多陀珥
 霧加幣流履仲天皇前御紀大御歌小 臨知度沛麼 哆駄珥破能羅孺
 古事記朝倉宮段小自日下之直越道幸行河内天智天

皇十年御紀童謡小奈尔能都底摩騰多拖尼之受羅武
 尔ど云ふ多陀尔 云ハ俗ハ字音ハ直ハ云事ハ
 少刺ハ万葉十ハ小朝鳥指澤鹿能山尔十二 二ハ朝
 日指春日能小野尔十四 二ハ小安佐日左指麻伎良波
 之世奈十七 四ハ小阿佐比左之曾我比尔見由流尔ど
 布て日影の勾来るを云あり 記傳ハ東方ハ向ハし
 受る地を云ふハ云れたり 朝日影を直ハ正向ハし
 物の障ハズして直ハ刺来る 朝日の夕日之日照国と
 云ふ日照の例ハ中臣寿詞小自夕日 至朝日照 互 有
 是多し記傳ハ夕日之日照国とハ西方ハ打暗ハ夕
 日影ハ障ハズ刺ハ地を云ふハ可一 万葉二九ハ朝

日豆流佐太乃因也尔又^三下^四旦日照島乃御門尔又^三
 一^下朝日照佐太乃因也尔十六^{十五}下^{十五}夕附日指哉河也
 尔^構楨屋之尔也皆日影力刺を以て其地を美たり師の
 冠辞考小内日刺す宮之ハ麗^一き日の刺す宮之殘り
 たりありと云て其記の其の語又万葉の歌共を引て
 其外小日影を以て宮を賛むる多きを思ふ可しと
 有り又物の美麗き事を賛むる小日影を譬ふ云り万
 葉十三^五下^五小内日刺大宮都可倍朝日奈須真細毛暮日
 奈須浦細毛云く百磯城之大宮人者云く其ハ女官等
 の五^五丹師原行宮の宮仕する状を賛て云くあり備地

を賛る小日影を云事ハ大方日影の刺ぬ地ハ軌^コ制無
 き者ふれども高く打晴し殊小能く刺す地を賞する
 あり可しと云れたるが如し又亦^云く朝日夕日共小賞
 す地を賞する事ハ右小引る祝詞小夕日夕日隱処と
 云て夕日小ハ抱くぬ事有を以知べし万葉十六^六下
 夕附日云くハ夕日の刺す地故^云其地甚吉地詔而ハ
 あり小就て賞たりありと有り故^云其地甚吉地詔而ハ
 朝日の直刺し夕日の日照り美麗き地の状を賞稱
 へて其処を得るに給へる御事を喜び也御在り坐り
 る由の大御命小坐り吉地と云例ハ神武天皇甲寅年
 御記小又聞於鹽土老翁曰東有美地^{青山}四周云くと有ハ
 中洲の地を賞て美地とハ申うて給へる^是あり備皇祖



天神より皇御孫尊を天降し奉りて給へるハ葦原中
 国の大君主宰と事依り奉りて給へるなり然るハ猿
 田彦神の狩迎奉りて給ひて皇国の内ハ小殊ハ
 西偏あり襲国ハ一ハ尊奉りて其地ハ任じ奉給へる
 是ハ心得ぬ事なり己ハ大国主神の国土を避奉り
 給へる上ハ何国何処の神ハ拒み奉りて事の有り然
 るハ其天下万国の中ハ最美地と有り中洲ハ都敷
 也御在り坐さるハ不審しとも何とも云ひ方無き御
 事ハふい有り故備思ふハ傳六
 凶礼ハハ日を北日ハ負て東より西ハ向ひ吉礼ハハ日

